



明治元_子年六月_子の
臧林秘談卷の六

~ 13
4012
3



賊禁秘談談卷の五目録

一 八川の園中納言忠令利百事
海禁不復云忠入夏

一 八川五郎門限月日と信玉と忠令事
海如水口の家中とお後の夏

一 田老中督病氣の子藏中忠令の事
海志於園主人の教も夏

一 八川の園中納言忠令の事
海根来の塔と忠令の夏

賊禁秘談談卷之五

八川の園中納言忠令の事
附 林忠令忠入夏

海禁不復云忠入夏
海如水口の家中とお後の夏

田老中督病氣の子藏中忠令の事
海志於園主人の教も夏

八川の園中納言忠令の事
海根来の塔と忠令の夏



昭和四年九月十日
寄
斎藤 俊六氏 贈

折廻り徳人賞能 予み利林を不持のせ 教養天下
の急對なりと安のり石河の心ひる 我茶の湯成るが
其谷を拭て樂人とぞ 其心の制と利休が此の如
なんぞ波を教養と盜取己が困の百と折を折と茶の
道と樂ひの其以松系寺所先利宗之別とよ 醫師
有軍字知係とくよ 其若るれば白雲 大人を借茶
湯とて度をも舎 一はる後、此宗之別と高橋博守の
長と抱ひの一将とくよ 其若るれば白雲 成人之別
か方事の時之通 女房も通ひ 其女大内とて

官女勤 其のなれば白雲 其心ひる、女は寺通 勝れ
まぬるよひ格別なると 非分はとてあふ 我も女と米
女房とせんと思ひとて 歩合の若くは女房の娘
なれば 櫻、浪人の女房とて 其の心ひる、我の制とる
こまば大内、忠入、女房とて 其の心ひる、夜入、忠入、門の
かき外の筆花とて 其の心ひる、日死門、所所の、官女の初
心を何通、廊下、忠入、其の心ひる、其の心ひる、其の心ひる
なると其の心ひる、流石、神流の天子あり、其の心ひる、其の心ひる、八百神
守護、其の心ひる、其の心ひる、其の心ひる、其の心ひる、其の心ひる、其の心ひる、其の心ひる

下と階へと圍ければ我新進勢揃て以忠入と云とも兼る方
及ぶ大舟に三種の神意ありて是は非常を以てめり
友我是もも是なるを 押て迫は成是ん中必忠と云
信は此今有は神候之也之まをて是如え入ある所敷
今更と女皇運きたるをいはれぬと云 是はるまも五
津しく思案してあり見ると我浪人をまて帯のせれば我之
氏百程と云者將家来と付り内所敷も通の事乃及ぶお位
は將家来あり是を来て是 忠思ふは信は將家来と云て
後向 后の初冠入る事と云入るをいひさ之と云と独

笑ふて何成とも能く家と引別くれんと白川の言ひける
よせその寺中納言忠徳圍糸指りて夜入白川橋
若掛りか小處の島門公人といふる若掛りとなんぞと云
あれば宗物守の侍守る寺中納言殿と云りて島門後平
板敷言侍と云と云りてお放込りて宗物守を横へ
又は右殿より切落されると云て宗物守も大地へおれ敷
多の家来桃灯を捨出さうと云りて島門の口を籍へおれん
宗物守を引はなぬと云て君のよ中納言殿を引て是を
揚て油命と云いふるもて將家来とぬと云 ちもいふは命

を助んまきかかばい付放すと切舟もば長袖のわん
身成に伺もさあす指うつむらふ新を着筋ついで
引もかむ将家来手あふ引利は貞せうと小脇がせむ
翰まある中納言殿に若のまゝに化してあつたえぬ
は家来も人もなく指を越えは休の家来もまゝに
之人を見月白無垢斗の所有孫に伺もさあす
と舟舟抱ちと家来の字西三宗と名の家来引流せ
の島に利えたる将家来をそ一腰あつせぬ今宵ぞか
達せんと二度内裏へ入る御もみ人目とくはまは
所へ掛くるいと伺んと廊下をつと口かきし
舟いあふ女の居る所とんと外へかきと伺もさあす
なればむつそと翰も人もさあすとむらふの袖を
まぼり鈴口の戸をぬ舟へ入次の戸の入口へ帳掛たふ
かきと退舟と名は情老女と名は毎夜女と名は
老女と名は月夜新能進一足二足あつてはけん
ぬとや焼考のゆめあふ者なれぬと白見と名は
の島にさあすの焼考がさあすは板屋と名は又と名は
らんとはむらふの女も眼くむらふの階も別れをさへ

引とうむらじ 秋ふせく行し事をそのほせ斯何人と金
只方で見ると物の有りし時おらねはむ杯押あらしとあがり
又と目録で引んとするよまのおめとさんねらずと又も思ひつひ
吾友の老い殿とふ計と歩ひふ中初云の将容来と不集不宣
述来は後天よと下さる友識ならは秋が老い夜で
位云は是れと其思入夏成らと 寝の門神の湯来
や家潮も乃す是述数度お思と 一も眼く下
み長ぬるふんふんこるふもとあす室の山入をが
手とむなくまると是れは信と次牙なり秋今
池邊の株梁と思て津くもこのなり 一旦見入しとあ
我が手も入といふ事なり 今日唯今秋終の海と
と海系にたる事なり 云量のは将容来とあなふり 控二豆
之是まの 思入は吾友の庵にかけぬ 又と目録で引ん
とすふの辨ぬるもて曾前かなくあまもふら老いばふ
まののり云門と大とよとあその完子の詮方なり 斯
ふらんつとせぬかふもふくぬるまこそ海系なり是
ふとふふあぐらと宮門のさる偏思識とあ
と極はがみとた己が完かるとあり

木川を名づけて隠目目と偽りて也其
附水口の家の中を相後と事

あるにせざる事申すに白川橋ありて家来入人印
殺されたる事將家来と利直史はしりて斬る由致しめ
其趣を傳奏し、白川殿は作せざる由翌日所
殿鈴口の外に冠を家来ぬき捨て及女方を是と見せ公を
方の子と斬りし事告りて、中川殿方は傳奏
去の事とて、殿之の所は沙汰成り、白川大長共次公を
知傳奏の公は沙汰成り、將家来を改方と申
初云の將家来とせざる事、白川橋を盜賊と取事
カサとの所一夜の事なれば、方所詮儀方所事
忠告の事、家来を遣はし、白川相知りし事と見せ、
處にありし、母との事と後して、其の事と見し、
よふ事、内裏掛前日徳昌院法衣七知、深き人
津しくと考て、曰をせざる事申すに、盜賊を將家
来と見、公は、身を危し、内裏に忠入と見し、
公の女の内を、色情と見し、忠入、不鈴の
口より、王位、忠入、支奇將家来と捨て、逃るる事

世為奇反、恨み有る内裏の禁法破り罪之あり
と斗りもふれに何れも人々を害し公令を利し内
裏一忠入事二人罪人草を合て詮儀仕りしと敷
重し吟味ありしとふ初更更大因来吉公朝鮮に
征伐始、文祿元年三月加藤主平改清正小西掃部
乃長あ先手としてあま七通の大小名軍せひ率
朝鮮國渡海なり。大因も肥前の名古屋連所由陳者有
次公門留をせりし。いかにかぬの更急度正次へ
とて、作下知有るなり役人、云ふ及ず所用人、を
其作身木村常陸脚、前野但馬身、徳谷月膳、土人を
合ん配詮義、及び由は討つて思ふ。今度朝鮮を
征伐して徳大忠為る為るに、家来末をわびやう
大金と取んとす。手もたを、集ま、後割り衣袋
とて、やふなり。格別御筆え、も立若さう手也。木戸
も近寄武士のなりの者た、更には、其格海の下、人平
そ水口、いして、急さひ、津川水口の城を、長束之内藏の
小浦の守りなれば、朝鮮陳、身肥前、名古屋相
後居城、を家来用人、も、若さう、手、不、之流、成、旅

将軍の侍り初ま人百連し、軍門を乞ふ今度朝鮮に征
伐せし徳國の人悉く在陣に候てゐる是の古昔護すと
いふを賊とせば旅の輩も、能く処せんこと所望に違
候し徳主見分り相違ひなく、今も作付當此に遊り
り、少局とて察するに及ばぬ、是れは、昨日申
の割当地、是れ汝の留り入ると相違ひ、養老毒太と遊業
多用人、通ひ、果ては、是れは、大不味、徳の所
との遊業、是れは、横の所、等々、是れは、一橋武平、
知不仕主人、留り、中、徳主、此、内、是れ、水、度、と、丁
寧、遊、業、の、使、の、古、昔、と、而、し、や、所、言、の、入、る、義、を、以
口、之、り、養、老、と、作、付、一、向、汝、法、を、い、ふ、と、吟、味
て、仕、は、如、私、方、と、大、小、若、の、若、想、り、身、若、擧、不、せ、ら、う、
主人、の、海、一、福、り、生、る、と、以、後、目、目、と、是、れ、擧、の、處、を、擧、
が、主人、存、居、り、善、状、を、辨、て、六、郊、の、交、り、を、す、と、方、を、擧、
若、と、察、し、て、を、い、ふ、事、を、い、ふ、内、を、い、ふ、他、一、度、て、日、見、
の、汝、法、を、成、ふ、ん、百、り、を、い、ふ、事、を、い、ふ、擧、志、を、作、付、及、
玉、中、順、え、云、し、内、に、區、を、取、り、斗、ひ、後、と、ん、村、と、い、ふ、
状、相、辨、て、表、向、り、成、い、何、れ、汝、法、を、い、ふ、と、い、ふ、

かのよき主人の自志のうめ七日相俵するも民
百姓の苦悩を憐れむとて村に立書状
と取交るればは處をすむれば役人誠度なる如く
思案有思ふのり有り物共の用意有後水
方言の意物に及ひし中せばす様つて不しくお海波
風云玉の豊に都る大國の所慶員の人と亦古
と以後はすぬぬの事仲言と始役人共是をすいす様
際目付なれば百姓の事祈る事と正し先遣る
百姓の度主人の心事及んと私の人入に前日案
内仕る事及び手前主人の内分より入るる物交
還るる程中ありは候身ありては安取中
て物有國中相出村とて正し百姓共も書状を取
りて送るに改役人の理難と揚て正さるるれば誠意あり
よと近き役人一人は作事なれば候は候是は物共の内
分を以て地を限禁割法ありは候は候とて
はとて恨の心は是近きは是は役人の横書とて何と
るるの事主人の事と先程を悔とも叶ふ是は
役人の思慮有とて一人の人の役人なるは

其序至んで如何様と云作との其後人の外に少局あり
す書状にて大岡の所行定に相討時、怪に内門或は國
督重さ、改湯加版も及乞物と申す其之を在跡の用
金ホ夜夜取きたる趣也と幸ひよ、あは言と脱し、今百
姓を所行とて企て少局さる時、一記も及との風夢かぜむなれ、若
し以所家為河、おりのなと違めあり、よいらひと以村
より書状をとり、横斗黄んと相候とて先役と東邊能
預り手候と申し、一變と種との地を、と其夜、其家元
長来七、左邊門を始る、張太、迎、茂木、其之、櫻門、山、京、東、勘、鷹
過去柄、木、重、役、人、十、二、人、所、通、身、の、長、弟、の、具、也、也、ん
と武、草、子、の、お、肩、子、の、箱、物、巻、お、何、れ、も、巻、の、の、せ、金、銀
と并、入、内、之、の、下、と、進、と、す、然、と、辨、是、の、う、深、く、と、文、細、と、信
り、其、者、一、つ、の、翌、日、に、と、進、の、人、と、申、得、昌、程、な、く
依、人、大、勢、に、連、字、物、城、門、通、身、と、申、戸、を、叩、て、お、い、
年、の、以、終、の、あ、ま、り、人、お、胃、柄、威、方、を、獲、立、流、の、出、立
た、も、大、岡、の、所、行、と、申、と、お、ん、之、城、中、入、て、と、夜、に、其、家、元
と、初、夜、多、の、役、人、立、替、り、入、替、り、と、や、ま、ひ、ひ、り、種、の、地、を、
り、之、夜、入、り、連、来、り、近、居、の、侍、も、大、岡、の、所、行、の、

西とす。一、次の月、和の役人、是を少く平生、是
大内藏、少内藏の物語、府令、一、七、八、九、の所例、
今度の大内藏、一人と見、一、い、く、役人、中、悪、を、
ひ、る、是、引、り、て、頼、む、不、成、程、実、事、中、道、物、志、
取、り、中、へ、へ、な、れ、ど、何、事、り、て、也、内、談、被、之、
と、其、後、頼、む、い、ま、事、於、座、一、海、い、ま、と、ん、の、斗、略、を、

賊禁秘談卷五終

賊禁秘談卷之六

田村中勢、病、氣、身、藏、平、忠、公、事、
附、志、持、之、國、の、主人、を、殺、す、を、変、

云、水口の家、中殿、の、為、主、と、云、大内、の、源、目、月、の、は、
直、言、之、の、後、一、を、ひ、て、一、主、政、の、若、忠、忽、然、是、を、一、主人、の、
所、為、我、也、也、何、如、の、沙、咎、め、ら、ん、と、斗、難、一、老、角、先、後、
の、侍、を、頼、目、月、と、述、す、一、く、い、な、し、と、お、強、一、て、先、後、の、侍、を、
玉、家、老、長、米、七、郎、左、衛、門、長、米、次、右、衛、門、あ、り、て、
食、意、一、及、又、之、國、中、へ、一、と、公、換、一、を、沙、咎、め、り、

同定法作戸示仕合夫より所存通主人所用
先茲有しむ我も懐はるるの舟は文國故を
之取らむに村より舟果云やうに被重ゆは村の順
え及び中乃教らとを好むゆひは法体是と書新に後且
有し如く老公根口より成屋敷に作之と下と形ゆれば
先後の侍員志のめまを一向お雜事之長走もゆめお
あるは十ヶ村と一ヶ村と云如く夢河と云ふはゆれば
河た左如く中流く之田下田を真橋の村之案内の乃筋
と且那と云ふは合相志を成とて成ゆればと云ふは
雜中と六ヶ敷云ゆれば元來村一被言河と云ふは
掛は又と云ふは及んと云ふはと云ふはと云ふは
其種と所形中へ此を云ふは所長者頼と云ふは
亦も是物と云ふは及之度と云ふは入て膝と抱ゆれば
如成と所内忘中と云ふは及相折角ゆめを流ゆ
も主人怒屋云時其相變はと云ふは何事と云ふは
何ん体ゆめと云ふは及非と云ふは中掛と云ふは
ゆめと云ふはゆめと云ふは及後人中かと云ふは
括也何分屋敷及取成と云ふは及形ゆれば先後の侍合

更納まゝり主人の前におて良久資甲法の如くて家老
長束七郎老鷹と呼んで雅成をなれども此形舟物之働
順見の式延引と成りしる思安方々保を祈る後
此の旦那名代として物去る夜同たるの村十ヶ村一週
におも帳而、鎌倉見下中右の杯は公儀一海難一物
去るは、何事もおも致所然し斗中といま七郎老鷹
大に積重の許せ給ふ仕合と礼を述べ日願ふと此其
之知り所と見合違ふくは海に帳而徳を長束大藏
少津と名を借るを云津と斗別と名の違ふと十

六日と帳而さるる水口と之は濃路と掛、其濃路と若
村の城を田丸中野とて病氣を吾城と改むる、女子斗
病死者家替とていふと一家中評定、及ぶる家老
藏平と名を借る、こが妾殿の男の子と云ふは、
やつおせくとおん生、病室の機をとりむるとして
中務殿病中を祈る、是を悟り志願を為し病室の心算
候の祈りて花口を遊名切月ぬ、病中をなれば手内
心算先之寸斗切此のふりて振えと仕わらぬ志願を
志す、おんおれば主人の力を集え自ら之をとり進め

の南に遊ぶ事、石を高く築き、馬をたて、
主人を害す。大塚之所、執ひける中務殿も皆
存命なりしが終つた。くわりの家の中、
死に隠し、病死と云ふ家督の義、
舟の波男とさんと病中の顔書、
福氣政の檢使りて福京大七郎と云ふ大目月の
役ならば、
向水口で役人をして、
まんじと千金をゆかり、
由是ぞ幸ひ余中、
皆殺し、
骸と改り、
よの月念せ、
脇通、
岩村の家中と見せて、
此中務家来所、
いと平伏せ、
福京大七郎殿、

向水口で役人をして、
まんじと千金をゆかり、
由是ぞ幸ひ余中、
皆殺し、
骸と改り、
よの月念せ、
脇通、
岩村の家中と見せて、
此中務家来所、
いと平伏せ、
福京大七郎殿、

福京大七郎殿、
いと平伏せ、
福京大七郎殿、

と仰る路の之を賜ひ之を賜道一依ひ以て
うかへて之を待たしむ。築城東に六本首
川経八泉此に依て其の寔意の云ふ後より付て
掛る思ひ掛る。中なればふといふ。と懸るうらなと
初に打伏し大勢を四方に包みり。と之を取固福
東七郎を測る。つた人の成。今ふは。山賊を
示も又國の之役。福原七郎。とく。と捕大飛
よれんと。とかん。海の家。ま。と知。口。と板。切。て。掛。る。
後。と。中。と。ん。を。入。る。と。川。の。島。板。も。ん。を。福。原。首
此。の。亦。前。血。指。く。侍。人。の。切。り。と。す。い。と。と。う。ら。ん。と。ある。依
の。ま。と。も。主人。と。付。也。ぬ。い。と。な。と。て。近。ん。と。四。万。廻。と。れ。今
斗。所。助。と。地。の。又。依。て。な。と。と。ひ。る。と。島。と。声。と。板。と。押
一。手。の。首。が。成。と。皆。殺。す。と。島。と。ら。と。と。ん。と。
と。人。も。取。進。と。と。ぬ。と。と。手。と。を。四。方。に。か。と。み。し。と。渡。も。と。去
い。と。た。と。り。と。我。と。ん。安。と。と。の。島。に。福。原。が。斬。と。ま。と。依
の。ま。と。も。と。板。田。と。中。勢。が。居。城。と。ま。と。と。と。我。と。り。と。是。と。と。の。島
之。後。と。な。つ。て。手。と。と。と。ん。と。順。と。と。と。い。度。に。檢。役。と。事
取。と。と。又。主人。と。な。つ。て。手。と。と。と。と。と。役。と。と。檢。役。と。事。と。

あせりし世帯の家老役人途中迄白ひぬい平伏す
まともな園の之役の権威を脱したるも平入城の之役
のるに危しある骨がたもたふと云へ有様されば又園の
所成に至り皆形もあふた後とらうある者多ければ
一家中の事誰あつての園をせん知る者云彼乃
之役とらぬぬしは改らつてえ来る後死成
張えとの存成、格別、食意の老述も機嫌を
首尾よく仕とんまゝに引も去るを、其之を
麻新一ふそ、信しかり

公川至馬の岩村の城の之役の事

附根来乃培一徳の事

去まともな園の思の淵とゆえればまごと夜入るを体
是して其る、田舎が麻石、思入る後死の如きゆと見
定心中笑てまゝぬ新を存後、度、事内述て
君万通、家老役人をも、平伏し、守替が死骸夜
忌物とん、包屏風と立込、男二人側、手せつ、指さ
捨段、之を程隔てた、ま、ゆ、と、なる、存、を、南、科
と、ん、を、あ、る、の、園、の、一、目、を、ま、り、眉、を、志、の、め、中、替、の、殿

所病死の以有る之使と以有哉の余今何神でん
る痛死の相よあは鈍死をわそそられしと見て云
をの眼自然に成るる家中の元中主と云ふ事
え通ふれば皆と云ふ事思ふ眼も斯く現れ密
ト之使も更と云ふ事 実と云ふ事之使も人と思ふ
をその 若くはと云ふ事 入之使も 思入を存せしむ
主人永の病と氣を相果はる遠く 備ふ所之使
の所憐愍をも成ひなると一同に思ふればわの憐愍
養子の氣よと云ふ事 挿使もまよひ後養

なれば一同えても早急なると云ふ事 自ら
死骸を改念す事急し中後なく家退轉て必良中
の表向むまお身よあひ情と云ふ事 余をいかに家
のまの如きお後でと云ふ事 暫く休むと云ふ事 味
ト及んむ挿使の中ぬと云ふ事 神の首尾宜か
らずの如く教是後と云ふ事 其方と云ふ事 云後と云ふ事
教一退と云ふ事 挿使の成りと云ふ事 其者挿使といふ
を海さんと云ふ事 斗のまの如く家老後人先の業を
云情者の後人千金と云ふ事 積んで云ふ事 家をまんと云ふ事 相

後々彼の侍を頼り寮より内定伺て千五百両を遣
物と云はれぬ鳥の如く在る及中勢殿いふ中
年と云病氣多き云の死相有し其の云を遣はる局
たれば家勢云を遣はる作有成と云海にれば家中宛
有る所信中といふ夜の事仕度してね朝山岩村と
おまゝ飛ぶ如く急る海に家来たる主人の云散り茶
礼伊波兵衛助の朝鮮在陣有るお田老が其の
の海成とい急養子の成岩村へ来り新に檢使
福永と名乗りお田老の如くおいてと下を殘り害

る越進にお知れ京が所を主在居以ておまゝの
向ふと尋ふと使と教書の事とて悲しむ人罪以て
返還しつゝと業重重所詮儀お成田老が家中
におまゝの味ありと使にお海にと者瑞言とてする
新にいふ所疑ひかゝりお田老の侍側中進に
おまゝの揚屋へ入るの控向かれば中勢殿後死の候
子孫を託す候が手付の通し中を明白に飛ぶとて
流るる誠度中流に家老三人の腹を伴ひお田老の家
退却せしと使と教書も家中の業をいんと猶も所詮

儀及びのち元來、（口）は白状すべし如きは
之候と稱入奉り、（志）ある、（志）惣相、其者と詮議あり、
草と合所、（口）味方、（口）之、（志）島、（志）夫、（志）尾列、（志）之、（志）越、（志）又、（志）隱目
身と稱、（志）新、（志）之、（志）淋、（志）指、（志）と、（志）申、（志）心、（志）金、（志）銀、（志）と、（志）申、（志）め、（志）法、（志）主、（志）と、（志）也、
け、（志）不、（志）し、（志）長、（志）束、（志）大、（志）内、（志）藏、（志）大、（志）津、（志）敷、（志）と、（志）京、（志）都、（志）一、（志）海、（志）水、（志）口、（志）の、（志）家、
と、（志）海、（志）島、（志）國、（志）政、（志）と、（志）申、（志）時、（志）隱、（志）目、（志）身、（志）入、（志）奉、（志）り、（志）由、（志）長、（志）束、（志）七、（志）島、
物語、（志）志、（志）は、（志）大、（志）内、（志）藏、（志）大、（志）津、（志）敷、（志）と、（志）島、（志）入、（志）大、（志）内、（志）藏、（志）大、（志）津、（志）敷、
身、（志）長、（志）束、（志）知、（志）法、（志）と、（志）云、（志）り、（志）し、（志）之、（志）隱、（志）目、（志）身、（志）と、（志）云、（志）り、（志）跡、（志）も、
之、（志）傳、（志）れ、（志）我、（志）の、（志）所、（志）と、（志）云、（志）り、（志）何、（志）と、（志）む、（志）に、（志）法、（志）成、（志）は、（志）余、（志）玉、（志）の、（志）思、（志）ひ

や、（志）其、（志）り、（志）是、（志）罪、（志）之、（志）通、（志）り、（志）大、（志）正、（志）犯、（志）と、（志）申、（志）す、（志）其、（志）の、（志）事、
は、（志）甲、（志）申、（志）法、（志）主、（志）觸、（志）り、（志）大、（志）内、（志）藏、（志）大、（志）津、（志）敷、（志）と、（志）傳、
隱、（志）目、（志）身、（志）と、（志）云、（志）り、（志）國、（志）を、（志）也、（志）と、（志）申、（志）す、（志）由、（志）長、（志）束、（志）七、（志）島、（志）の、（志）事、
何、（志）と、（志）其、（志）所、（志）に、（志）據、（志）す、（志）の、（志）事、（志）長、（志）束、（志）七、（志）島、（志）と、（志）傳、（志）流、
け、（志）也、（志）之、（志）國、（志）を、（志）也、（志）と、（志）申、（志）す、（志）中、（志）の、（志）志、（志）は、（志）向、（志）は、（志）是、（志）也、（志）と、（志）傳、
法、（志）主、（志）之、（志）歷、（志）し、（志）と、（志）云、（志）り、（志）如、（志）預、（志）め、（志）之、（志）事、（志）長、（志）束、（志）七、（志）島、（志）と、
手、（志）法、（志）成、（志）と、（志）傳、（志）暫、（志）く、（志）別、（志）と、（志）傳、（志）成、（志）て、（志）又、（志）長、（志）束、（志）七、（志）島、（志）と、
云、（志）渡、（志）皆、（志）分、（志）敷、（志）の、（志）事、（志）長、（志）束、（志）七、（志）島、（志）と、（志）傳、（志）竟、（志）の、（志）事、（志）長、（志）束、（志）七、（志）島、（志）と、
會、（志）共、（志）と、（志）傳、（志）新、（志）神、（志）社、（志）佛、（志）岡、（志）と、（志）傳、（志）遠、（志）入、（志）ぬ、（志）不、（志）し、（志）云、（志）目、（志）申、（志）云、

めの盗賊をれば其心ひうく製錢の老に金銀と手
人でも福やうの老候とていふ様まう紀列へ渡根来
の中塔のとていふ是を隠家とて下といふ手下の志と云
主紀列とていふ所へ迄盗に這入て根来へ角利釣執傳
塔のと種へ飛也才中へ凡夫のう及びあはれとて下
の老といふ也と云ふ 此の泉の徳藏或日根来の寺中へ
入候所方塔へ角の老とていふ 志考へ候迄まはるる板
の盗賊を塔へ隠候なる心と大勢押寄りていふ徳門
と云くも其の事と塔も手下の志とていふ 此の事

其人のめり然と大勢へ取らうせ塔のとて根来也我の目
本の盗賊の主なり 汝が百人と云ふ老といふおでわ
我の及り叶ん是迄候所也 徳藏と末代迄も残
えんと堂のくさうと云ふ 中へ二筋進ちごう塔の中へ入
るは後平片手と云くさうと板也 一重先の隠れ
里形多の如虎りといふればさつと思て迄月すめ之馬
い大勢進致 山中指て入ゆるが引来とれず候よ
りて云は根来の塔の後くさうと二筋振へ 此の事
より昔知る不々々まふめを徳門へ度系がわて人

佛前の降参の娘の爲に妻成りて其所へ来
任する妻も其後の盜賊の大将たる者なり
目方人と云ひ仕事は其の意に違ふ事
を爲す仕業といふ事なり
重なりての事なり

賊林秘談 卷之六終



增富神從

括之

有井佐中